

「やっぱり言葉が話せたらいいなと思いました」

— 現地校及びインターナショナルスクールとの交流学习より —

前ブカレスト日本人学校 教諭

大阪府東大阪市立意岐部東小学校 教諭 松村 晃 男

キーワード：総合的な学習の時間、現地理解、出会い

1. はじめに

ブカレスト日本人学校は、児童生徒数が20名前後の小規模な学校である。子どもたちには、年間を通して様々な出会いをさせることで、「現地の人・もの・こと」をより深く理解したり、英語やルーマニア語のコミュニケーション力を高めたりする授業を行っている。大使館やJICA・JOCVなど現地で活躍されている日本人の方々からの聞き取り学習、現地日系企業の訪問や工場見学、ルーマニアのテレビ局や自動車工場などの現地施設の見学や、現地の学校（幼稚園から大学まで）との交流などが挙げられる。これらの活動は、総合的な学習「カルパチアタイム」の時間を使っての取り組みとなっている。今回は、私が国際理解教育担当として行った、2006年度の現地校及びインターナショナルスクールとの交流を紹介したいと思う。

多くの日本人学校で、現地校との交流学习は行われている。これまで本校でも年2回の交流活動を行っていた。日本文化の紹介として「書道」や「折り紙」などを通して、交流することが多かった。また、日本語・日本文化に関心の高い現地校との交流を重視していたため、本校からの距離が遠く、教師同士の交流もその時のみで終わることが多かった。これまでの交流からさらに一歩進んだ交流とするために、次の2点を年間の重点目標とした。

- ①本校からの距離が近い学校を選び、同じ学級と継続的に交流を続けていくこと
- ②交流授業から合同授業（日本人学校と現地校とのTT形態の模索）やイマージョン教育への発展

2. 交流の実際

(1) 現地校との交流

日本人学校から車で5分の距離、つまり教師どうしが授業前に何度も意見交流ができる近さというメリットを求め、年度初めに17番学校という現地校との交流計画を立てた。5月に第1回のミーティングを始め、11月の交流本番まで数回のミーティングを重ねた。その結果、音楽・図工・英語の3教科をTTで授業を行うことができた。図工では、題材を「冬」として、両校の子どもたちが材料を自由に持ち寄り、本時では話し合っ一枚の画用紙に表していく活動を行った。クリスマス・雪あそびといった共通の絵から、こたつや凧揚げなど日本特有の絵までを、コミュニケーションを図りながら、書き表していった。各グループで仕上がった作品は代表者による解説を行った。この解説はルーマニア語によるものとなり、通訳の先生がサポートをすることとなったが、自分たちと違うところ、同じところを興味深く聞き入り、うなずく子どもたちであった。



「ルーマニア人と図工！」 Aさん

今日、ルーマニア人と図工をしました。ぼくはできるだけルーマニア語をしゃべりました。きれいな作品ができました。やっぱり言葉が話せたらいいなと思いました。

17番学校との交流会

- 1 ねらい
- ルーマニア語や英語をコミュニケーション手段として同年代の外国人と交流を深めることを通して、自己のルーマニア語会話や英会話能力の向上を目指し、今後の学習意欲を高め目標を明確にする。
 - 自分の願いや思いを豊かに表現し、相手の文化や習慣の違いを理解し、尊重する態度を養う。

2 交流日 11月21日(火)

3 場所 17番学校

4 時間

10:45	学校出発
11:00	17番学校にてあいさつ(代表挨拶アリーナクラス上学年組から)
11:10~30	学校案内
11:30~12:00	合同音楽
12:00~12:50	低中学年(図工) 高学年(英語)

5 授業

(1)17番学校のクラスについて

音楽…12歳の子が20人程度。 図工…10歳の子が10人。 英語…13歳の子が9人。

(2)内容について

音楽 担当 G先生(現地校)とY先生(本校)

「夕やけ小やけ」「Măndru-I jocul Hategana」「Barbu Lautarul」を練習し、発表し合う。まずはじめは、吉川先生が現地校生徒に「夕やけ小やけ」を指導。10~15分程度。一方、日本人学校児童生徒はルーマニア語の歌を10~15分間、17番学校の先生から指導を受ける。その後、お互いに発表し、最後は合同で歌う。

図工 担当 Ad先生(現地校)とM先生(本校)

	学習内容	留意点
5	1 授業者が自己紹介をする。	・主担当は、17番学校のAd先生
5	2 学習課題を与える。 「冬を表す作品を与えられた道具を使って作らしよう。」	・はさみは使わず、手でちぎる。 ・折り紙、画用紙、のり、クレヨン、色鉛筆を用いて表す。 ・事前に冬と言われて思い浮かべる言葉をピックアップしておく。(各校)
30	3 グループで活動する。	・日本人学校2人と17番学校2人で構成される4人で一組、合計5グループできる。 ・まず自己紹介から始める。 ・作品の出来映えよりもいかにコミュニケーションをはかったかが重要。
10	4 グループごとに作品を紹介する。	・事前に発表する形(代表が言うのか、分担するのか)を決めておく。 ・感想や質問を発表するように促す。

英語 担当 An先生(現地校)とK先生(本校)

	学習内容	留意点
1	2人組で自己紹介、お互いにコミュニケーションをはかる。	・主担当はK先生。
2	1と同じ内容を9人分を行う。(3分×9人=27分)	・趣味、食べ物、テレビ番組等を話題として、交流を深める。
3	最後のペアの隣の子を紹介。(1分×18人=18分)	

また音楽では、両校の音楽担当者が、日本・ルーマニアそれぞれの昔からなじみのある曲を選び、お互いに楽譜を交換した。そしてそのうちの数曲を授業で取り扱い、交流授業で一緒に歌うこととした。日本人学校からは「夕やけ小やけ」の曲を、17番学校からは伝統的な曲を選び、お互いに交流会に向けて練習をした。このとき学習したルーマニアの曲は、ルーマニア語会話の時間で意味を学び、交流会だけでなく、学習発表会やその他の交流会でも発表する曲となった。

英語では、ルーマニア人生徒と日本人学校中学部や高学年の子どもたちがペアとなって、一対一のコミュニケーションを図る授業となった。これまでブリテッシュスクールの生徒と同じような活動を行ったことはあったが、お互いに第2外国語として英語を学んでいる両校の生徒が交流する点に、今回の意義があった。両校とも母国語ではない英語を使っての交流を行い、今後の学習意欲や英語の大切さを改めて感じた学習となった。

(2) ブリテッシュスクールとの交流

規模がそれほど大きくなく、幼稚園から高校までを併設するブリテッシュスクールは、本校の子どもたちにとって、交流を続けられる学校である。年間合計4回の交流を計画し、実行ですることができた。このブリテッシュスクールには本校の卒業生も通っている。一緒に学んできた仲間である先輩が通う学校はどんな学校か、どんな活躍をしているのかは、子どもたちにとって関心事である。以下、実施月ごとにその内容と実際を述べていく。

①5月

日本人学校を会場として第1回目の交流授業を行った。当日は1時間は日本人学校の先生が主担当の授業、また次の1時間はブリテッシュスクールの先生による授業を行った。ブリテッシュスクールの先生による授業は全て英語で行われるため、子どもたちは毎日学んでいる英会話力を実践で試されることとなった。コラージュをはじめ図工美術的な授業だったため、身振り手振りのコミュニケーションが成り立ち、子どもたちは楽しく活動できた。

日本人学校の授業や学年ごとに作ったお土産は、次の表に記す。なお、お土産とは、交流の際、日本人学校の子どもたちが相手校の新しい友だちに渡そうというアイデアからできたプレゼントを指す。

学年	内容
低学年	授 業：紙飛行機大会。折ったあと、飛ばし大会。一人が投げて、3人がそれを受け取る。チームは2校混合。 お土産：風車。メッセージは Can you come again? Let's be my friend.
中学年	授 業：紙相撲大会。けん玉紹介交流。折り紙紹介交流。 お土産：簡単なくす玉
高学年	授 業：習字教室。相手の名前をカタカナで書く。 お土産：授業で書いた習字の作品。折り紙（子どもが考えている）
中学部	授 業：事前に日本のことで知りたいことを調査。その質問に基づき7人で分担し答えていく。 お土産：折り紙名札を作り、相手の名前を漢字で書く。くす玉。

②9月

9月の交流はブリテッシュスクールが会場となった。始業から終業までまる一日を5月に交流を行った同じ学級で過ごすこととなった。交流用の特別プログラムではなく、相手校の日常を体験する1日英語体験となった。算数のペア学習では日本人学校の子とブリテッシュスクールの子とが2人組を組んで一つの問題を解いた。美術では専門の先生にデッサンの描き方を教わった。日本人学校とは違う学習環境や授業方法に子どもたちは大きな刺激を受けた一日となった。また、子どもたちにとっての一番のカルチャーショックは、10時過ぎのスナックタイムであった。（この文化は次年度フルーツタイムとして日本人学校でも試行されることとなる。）

③10月

ブリテッシュスクールの校庭で、ジャーマンスクールと日本人学校を合わせたの3校合同による UNday の集いが行われた。UNday とは、1945年10月24日の国連憲章が発効した日を、加盟国が「国連デー（UNデー）」として記念することを指す。ジャーマンスクールからは、基調講演と歌とダンス。ブリテッシュスクールからは民族衣装ショーや歌などの発表が行われた。日本人学校からは校長によるスピーチとプログラムの最後を飾る和太鼓演奏を行った。日本人学校からの発表は毎年最後を飾るイベントとなった。

これまで2回の成果としては、こういったイベントの際に、手を振ったり挨拶したりできる子どもや先生が増えてきたことである。

④2月

2月に4回目となるブリテッシュスクールとの交流学習会を行った。今回は小学部の学級間交流となった。

低学年は、前回の1日英語体験と一緒に過ごした year 4 のクラスと交流した。本校低学年クラスからは「おむすびころりん英語劇」を、year 4 からはダンスの発表を、お互いに鑑賞し合い、感想交流をした。その後、「おむすび体験」と題して、両クラス合同でおむすびを実際に作って食べることとなった。まるいおむすびを眺めて、「ころころ転がる意味がわかった」というブリテッシュスクールの子どものつぶやきも聞かれた。

中学年高学年は year 7 のクラスと交流をした。本校の子どもたちはカルパチアタイムの時間にまとめた「ルーマニア調べ（中学年）の発表」、「ゴミの問題（高学年）の英語発表」を行った。この発表に向けて、人前ではっきり話すこと、英語で考えを伝えることに力を入れて事前準備を行ってきた。また year 7 からは、環境問題に関する劇の発表があった。



1年間の学習のまとめを学級や学校内だけでなく、他校へ発信するためには、よりわかりやすくまとめ上げることが求められる。それが相手に伝わり感想を得られることほど、自信がつくことはないと思う。子どもたちにとっては1年間の積み重ねの成果を感じることができたひとときとなった。

3. おわりに

第2回の交流で手を出されて泣いてしまった本校の児童Bがいた。交流後に次のような作文を書いた。

「クラスの子とけんか」

Bさん

今日、ブリテッシュスクールで、チームだったCという子に頭をたたかれました。頭を手で二回おしてきました。わたしは、ないちゃいました。たたかれてくやしいと思いました。かいだんを上って、クラスに帰るとき、考えていたら、なんで二回頭をたたいたんだろうと思いました。ふしぎでした。そのあと、先生が話をしていました。しばらくたったら、Cが、わたしに、「ごめんね。」と言いました。わたしは、「いいよ。」と言いました。先生が、「いい？」って聞いたから、Cが少しかわいそうだと思ったから、なにか言ってあげないとかわいそうだから、「いいよ」って言いました。やっとおわっておうちに帰れるから、ほっとしました。Cがごめんねって言ってくれてよかったです。

この児童にとって、ブリテッシュスクール児童Cとの「ごめんね」「いいよ」の話が一番の思い出となっていた。しかし、次の第3回のUNデー交流の時には、Cがわざわざ手紙を持ってこの児童のところにやってきた。その紙には絵が大きく描かれてあり、その上に「I'm sorry.」と書かれていた。第2回、第3回の交流を経て、第4回の交流のあとに、Bは次の作文を書いた。

「Cはやさしい」

Bさん

Cは、わたしがブリテッシュスクールに行ったときはいやなことをしたけど、きのうは、おむすびころりんを見ているときに、じょうずだなというかんじで見ました。わたしが、ぶたいで前をむいているときに、Cを見ていて、Cはわたしを見ていたから、やさしいな～と思いました。

でも、Cはかいだんでへんなことをしていて、先生におこられていたから、Cはやっぱりやんちゃぼうずだな～と思いました。

「やっぱり言葉が話せたらいい」ことを痛感することになる体験は、在外ならではの貴重なものである。言葉が話せたらいいという気持ちは、異文化の中で「相手のことをもっと知りたい」「自分のことをもっと伝えたい」という欲求から生まれてくる。交流を繰り返す中で、知りたい伝えたい相手が見えてくる。同世代の子どもが別の学校でがんばっている姿が見えてくる。別の世界で生きている仲間の姿が見えてくるといってもいい。彼らもほめられたり叱られたりして学校生活を送っているのである。そういったこと全てを知り合う中で、子どもたちどうしがよりつながっていくと考えている。

これらの交流学習を有意義なものとするために、本校では週2回のロング英会話の授業がある。また国際理解の時間として、週2回のルーマニア語会話、そして毎朝行われるショート英会話がそれぞれ15分間ずつ行われている。語学学習はこれらの交流学習の礎となり、子どもたちは異文化で「生きる力」をつけている。

単なるイベント的な交流会ではなく、さらに学びたいと子どもたちに思わせるような体験を教師は仕組み、子どもたちが在外の特色を生かした貴重な出会いをこれからも経験していくことを願っている。